

經濟論叢

第九十五卷 第五號

- マーケティング論成立の沿革……………橋 本 勲 1
- イギリス式貸借対照表の初期の経験……………高 寺 貞 男 23
- 形成期における標準原価計算論の
管理的性格の意義……………野 村 秀 和 45
- 恒常在高法の批判的考察(2)……………中 居 文 治 63
-

昭和四十年五月

京都大學經濟學會

イギリス式貸借対照表の初期の経験

高 寺 貞 男

I

周知のように、貸借対照表の形式としては、借方（左側）に資産を、貸方（右側）に負債と（自己）資本を配置するのが普通であり、イギリス以外の国ではみなかかる一般式によっているが、イギリスでは、伝統的に、その他の諸国とは逆に借方に負債・資本を、貸方に資産をおく形式——イギリス式——をとっており、現在でもかかる伝統的形式をすてず、いぜんとしてそれを守っている。だから、イギリスの経済学者ヒックスが「経済学入門」書として有名な彼の「経済の社会的構造」(John Richard Hicks, *The Social Framework, An Introduction to Economics*, Oxford 1942) で国民資本ナショナル・キャピタルの説明に貸借対照表形式を援用した場合にも、アメリカ版では一般式にかえられているが、元のイギリス版では左側に負債を、右側に資産を配置するイギリス式によっている。

では、どうして、いつ、ひとりイギリスで他の諸国とはちがった貸借対照表形式が使われるようになったのであろうか。この点について、イギリスの会計学者ライルは、彼が編集した「会計学百科事典」(1903年)の中で、他の諸国とはちがって借方貸方の中味を左右反対にしたイギリスの貸借対照表「慣習は、議会の〔制定した〕法律、特に会計理論に精通していない人々によって作成されたに相違ない1862年会社法附属規定 A (Table A) に示された形式の影響によって生じたものである¹⁾。」と断言しているのだから、明治41年(1908年)にかかるライル説がわが国へ紹介されて²⁾以来、無批判的にそれを受入れ³⁾、「日本に於

1) *Encyclopaedia of Accounting*, edited by George Lisle, Vol. I, Edinburgh 1903, p. 205; George Lisle, *Accounting in Theory and Practice*, new edition, revised and enlarged, Edinburgh 1909, pp. 72-3.

2) 「ジー・リスリー氏 (G. Lisle) の所論」によると「この様式の慣例は、千八百六十二年……の会社条例に起源したるものたるべく、而して、同法の如きは会計の理論には全く無学の人等に

ても此説が近時一般に認められている⁴⁾。」

もちろん、ライルは根拠なしに以上のような説をとらえたわけではない。彼は、まず、「1859年以前に簿記書の著者が資産と負債とをどのように取扱っていたか⁵⁾」を調べた結果、表1に示されているように、一般式が「1862年会社法の〔議會〕通過前にはイングランドで主として採用されていた形式であった⁶⁾」ことを確認し、つぎに、「その後イギリスで出版された簿記書の著者はそのほとんどが左側に〔それまでとは反対に〕負債を置く方法を採用している⁷⁾」事実を考慮に入れて、そこから、イギリス式貸借対照表は1962年会社法附属規定Aの貸借対照表雛形に由来する、という結論をひきだしているのである。

しかし、以上のようなライルの推論をそのまま承認するわけにはゆかない。なぜなら、ライルは簿記書にあらわれた残高勘定(=残高勘定表)の資産負債の配置様式が実際に作成された貸借対照表形式を一応忠実に反映しているものと前提して、もっぱら簿記書上の残高勘定(=残高勘定表)のみにたより、企業(特に各年代の典型的=代表的企業)が現に作成(報告)したところの貸借対照表の実例にあたることを完全に回避しているからである。いや、そればかりではない。慣習を重んずるイギリスにおいて、旧来の貸借対照表慣習を無視した貸借対照表雛形を会社法の附属規定中にとりいれたとはとうてい考えられないからである。やはり、アメリカの会計学者モンゴメリーもいっているように、貸借対照表形式についての「イギリスの実務は、もっぱら慣習に由来するもの

依り草案されたるものたることは明かなり。」(東夷五郎「商業会計」第1輯、明治41年、4-5ページ)。

- 3) 「英国に於て特に貸借対照表の形式を異にするに至りたるは、もと法律の規定に依つて余儀なく馴致されたる結果であつて、決して会計学上の理論に基いて生じたるものではない。即ち一八六二年の会社法は Table A に於て貸借対照表の雛形を示し其の左方に「資本及び負債」(Capital and Liabilities)、右方に「財産及び資産」(Property and Assets)と云ふ標題を附けたのである。」(上野道輔「貸借対照表論」上巻、大正14年、71-2ページ)

「イギリス式形式の起原は一八六二年の株式会社法 Companies Act の附属A表中に規定せる貸借対照表雛形に發するものゝ如し。」(上野道輔「新稿貸借対照表論」上巻、昭和17年、29ページ)

- 4) 沼田嘉穂訳著「ケスターの貸借対照表論」昭和7年、7ページ。

- 5) *Encyclopaedia of Accounting*, Vol. I, p. 206.

- 6) *Ibid.*, p. 206; Lisle, *op. cit.*, p. 73.

- 7) *Encyclopaedia of Accounting*, Vol. I, p. 206.

表1 資産・負債の配置様式

著者	発行年	書名	勘定またはステートメントの名称	配置法	
				左側	右側
S. Montague	1708	Debtor and Creditor made Easy	Balance	Assets	Liabilities
A. Malcolm	1718	Arithmetick and Book-keeping	Balance	Assets	Liabilities
William Webster	1721	Essay on Book-keeping	Balance	Assets	Liabilities
A. Malcolm	1731	Book-keeping	Balance	Assets	Liabilities
John Mair	1800	Book-keeping Modernised	Balance Account	Assets	Liabilities
T. Dilworth	1801	The Young Book-keeper's Assistant	Balance	Assets	Liabilities
W. Lorrain.	1807	Book-keeping by Double Entry	Balance	Assets	Liabilities
Chas. Hutton	1810	A Complete Treatise on Book-keeping	Balance	Assets	Liabilities
Rees <i>Cyclopaedia</i>	1819	Article on Book-keeping	Balance	Assets	Liabilities
J. Morrison	1820	Practical Book-keeping	Balance Account	Assets	Liabilities
P. Kelly	1821	The Elements of Book-keeping	Balance	Assets	Liabilities
J. P. Corg	1839	Practical Treatise on Accounts	Balance Account	Assets	Liabilities
C. Morrison	1843	Practical Book-keeping	Balance Account	Assets	Liabilities
J. Caldecott	1850	Practical Guide to Book-keeping	Balance Account	Assets	Liabilities
B. F. Foster	1852	Double Entry Elucidated	Balance Sheet	Assets	Liabilities
G. H. Boulter	1857	A Course of Book-keeping by Double Entry	Balance	Assets	Liabilities
W. Inglis	1858	Book-keeping	Balance Sheet	Liabilities	Assets
James Haddon	1859	Rudimentary Book-keeping	Balance Account	Assets	Liabilities

[出所] *Encyclopaedia of Accounting*, edited by George Lisle, Vol. I, Edinburgh 1903, p. 207.

(outcome of custom) である。ずっと以前にだれかがかかるやり方をはじめ、それ以来だれもがそれにしたがって、しまいにはその形式が法の承認を受けたのである。(イギリス会社法に規定された形式をみよ)⁸⁾とみるべきであろう。

そこで、かかるモンゴメリー流の見方にしがって、1862年会社法制定前に多くの企業が実際に作成(報告)した貸借対照表の形式について調べたところ、イギリス式貸借対照表の源流は、(1)ロンドン東インド会社の場合には1670年代まで、(2)「ロンドン銀行」としてのイングランド銀行の場合には17世紀末まで、(3)金匠銀行家としてのロンドン個人銀行家リチャード・ホール商会の場合には18世紀初頭までさかのぼれること、そしてこれらイギリス式貸借対照表の初期の経験がいずれも企業または企業主を主体として——東インド会社やイングランド銀行のような ゴールドスミス・バンク 合本会社 プライベート・バンク の場合には「合本」すなわち企業を、ホール商会のような個人企業の場合には「個人資本」すなわち「資本主[たる企業主]を主格として貸借を区別した……構造に由来するものである」⁹⁾ことが明らかとなったので、以下、17世紀後半から18世紀初頭までのイギリス式貸借対照表の初期の経験とその由来について、当時の典型的=代表的企業たる東インド会社、イングランド銀行および金匠銀行家ホール商会が作成(報告)した貸借対照表の実例を中心として、考察したいと思う。

II

「商人は必ず年末に決算すべきを説きその方法を最初に簿記書に取り上げたのは、オランダの科学者シモン・ステヴィン [Simon Stevin, 1548-1620] の簿記書[くわしくは、彼の著書『数学概論』 (*Wisconstighe Ghedachtenissen*, Leyden 1605-8) 中の一章「イタリヤ式商人簿記」 (*Coopmansbouckhouding op de Italiaensche wyse*)] である。しかし彼は、元帳記録に基き決算を行ったとはいえ、今日のごとく元帳の勘定自体の上に締切手続を施したので

8) Robert H. Montgomery, *Auditing Theory and Practice*, second edition, revised and enlarged, New York 1920, pp. 247-8.

9) 久野秀男「株式会社財務諸表論」昭和40年、97ページ。

はなく、元帳とは別個の紙葉で財産計算と損益計算をなしている¹⁰⁾。「さらに特徴的なことは、ステヴィンの〔財産計算のための〕貸借対照表〔staet〕では、近代のイギリスの実務と同じように資産が右側（貸方）に、負債が左側（借方）におかれている点である¹¹⁾。」すなわち、「彼は」はじめて、表2にみられるように、企業主 Dierick Roose の個人「資本」を主格として 'Staet of capitael debet に負債を Staet of capitael credit に資産を配置する「今日の英国式貸借対照表に相当する "Staet"…… を示した」¹²⁾ ののである。

表2 Staet van my Dierick Roose gemaect
op den laetsten December, 1600.

Staet of capitael debet		Staet of capitael credit	
Per Aernout Jacobs fol. 14	51. 8. 0	Per noten fol. 7-173 Ib 5	
Rest debet hier gestelt by		onc. tot 7 s'tpont, comt	60. 13. 2
slote van desen	3140. 9. 1	Per peper fol. 7-120 Ib	
Somme	3191. 17. 1	tot 40 dt'pont, comt	20. 0. 0
		Per Omaer de Swarte fol. 9	513. 12. 0
		Per Adriaen de Winter fol. 11	150. 6. 0
		Per Pictet de Witte fol. 11	448. 0. 0
		Per Iacques de Somer fol. 13	54. 18. 6
		Per casse fol. 19	1944. 7. 5
		Somme	3191. 17. 1

〔出所〕 田中藤一郎「簿記発展史論」昭和36年、162ページ (De Waal, *Van Paciolo tot Stevin*, 1927, bl. 274); 片野一郎訳著「リトルトン会計発達史」昭和27年、208-9ページ (John B. Geijsbeek, *Ancient Double-entry Bookkeeping*, 1914, p. 120)。

したがって、「ステヴィンの貸借対照表が現在イギリスでとられている形式と同じであることに注目し、このオランダの著者がイギリスの実務に示唆をあたえたかどうかを考究することは興味のあることである」¹³⁾ が、ここでは、よ

10) 小島男佐夫「簿記史論考」昭和39年、92ページ。

11) O. ten Have, "Simon Stevin of Bruges", *Studies in the History of Accounting*, edited by A. C. Littleton and B. S. Yamey, London 1956, p. 244.

12) 田中藤一郎「簿記発展史論」昭和36年、139ページ。

13) A. C. Littleton, *Accounting Evolution to 1900*, New York 1933, p. 134.

り広い視野から、なぜステヴィンの貸借対照表の後継者が彼の故郷オランダではなく、対岸のイギリスに出現したかを考えてみたいと思う。この問題へは、まだだれも接近を試みたことがないが、問題解決の糸口を、イギリスの企業の方が、オランダの企業にくらべて（合本企業として当座企業から継続企業への転換はおくれたが）、元帳記録のみにたよらず、さらに定期的に資産の評価をして、貸借対照表を作成（報告）する会計制度をよりはやくととのえることができた点に求めて多分間違いはあるまい。たとえば、1602年にフォル・コンパニーエン[vóór-compagnieën=先駆諸会社]を合併して成立したオランダの合同東インド会社（Vereenigde Oost-Indische Compagnie）では、フォル・コンパニーエンにおいてみられたような当座制が消失して継続企業化したとはいえ、前期的商業資本の「専制型株式会社」¹⁴⁾としての特性を企業会計面にもあらわし、「十年毎の一般的清算 [generale afrekening] に関する特許状 [第7条, 第14条] の規定にも拘らず、……取締役団の専制によって最初の十年間の会社財政は「一の明かにしえない秘密として打棄てられ」、……一般的清算の公告は取締役会の決議によって延期せられて了った。而して爾来事実上一般的清算は遂に一度も実行せられなかったのである¹⁵⁾。」「かかる秘密主義に相応じて、会計制度はフォル・コンパニーエンのそれと全く変らない程度のお粗末なものであった。……而して本来の貸借対照表の如きは決して作成されなかった¹⁶⁾。」

一方、1600年に設立されたイギリスのロンドン東インド会社（The Governor and Company of Merchants of London trading to the East Indies）の場合でも、1656年までは「和蘭東印度会社と全く同一の事情」¹⁷⁾にあった。すなわち、その当座企業制の乱脈とあいまって、「いかなる財務報告（financial disclosures）も社員になされなかった¹⁸⁾。」いや、そればかりではない。「この

14) 大塚久雄「株式会社発牛史論」第2部、昭和22年、163ページ。

15) 上掲書、178ページ。

16) 上掲書、193ページ。

17) 上掲書、324ページ。

18) William Wilson Hunter, *A History of British India*, Vol. II, London 1912, pp. 171 2.

秘密主義の伝統を別としても、会社自身完全な継続的な会計表 (statement of accounts) をもっていたかどうかうたがわしい。この会社の簿記はいぜんとして中世イブのものであったのである¹⁹⁾。

「しかるに、クロムウェルの改組以後この事情は一変した²⁰⁾。」すなわち、それまで各航海ごとに別個の「当座資本」^{ネーミナブル・ストック}を組んでいた「東インド会社」はクロムウェルの特許状にもとづく規約の下に中世的外被をぬぎずて、規制組合制 (Regulated System) の伝統を振りほらい、言葉の正しい意味で一つの結合した継続的・永続的合本会社に成長した²²⁾が、その際「退社せんと欲する株主はだれでも彼の最初の払込の現在価値を〔貨幣で〕受取って退社できるよう、会社財産は7年目のおわりに、さらにその後3年ごとに評価されることとなった。しかし、合本は会社の共有資本 (common stock) として継続し、退社した社員によって引出された貨幣は入社をえらんだ他のだれかによって〔払込まれて〕補填されることとなった²³⁾。」そして、実際に「1657年の払込から7年目の〔1664年の〕おわりに資産の評価がおこなわれ、その現実価値が最初の〔払込〕支出額よりも3分の1ふえたことが公開され²⁴⁾」「規定通りに退社と入社を許容した²⁵⁾」ので、「事実上の問題として、〔7年目のおわりその後〕3年ごとの資産評価は資産〔と負債〕の定期的報告 (periodical statement)

19) *Ibid.*, pp. 172-3.

20) 大塚, 前掲書, 324ページ。

21) William Robert Scott, *The Constitution and Finance of English, Scottish and Irish Joint-stock Companies to 1720*, Vol. II, Cambridge 1910, p. 89.

22) Hunter, *op. cit.*, p. 135.

23) *Ibid.*, pp. 134-5.

24) *Ibid.*, p. 276.

「1664年12月1日」現在の「会社財産の評価」についての「計算書は非常に詳細なものである」が、要約すると、「資産の負債にたいする超過額 495,735 ポンド 0 シリング 6 ペンス」「そこから……不良債権 (bad debts) にたいする準備に 14,876 ポンド 8 シリングを控除して、369,891 ポンド 5 シリングの原初資本プラス 30 パーセント、すなわち資本にたいする 130 パーセントの収益に相当する 480,858 ポンド 12 シリング 6 ペンスが残余となる」(Ethel Bruce Sainsbury, *A Calendar of the Court Minutes etc. of the East India Company 1664-1667*, Oxford 1925, pp. 113-4) 結果となった。そして、「1664年12月12日の総会」で「未分配全残余資本 (all remains of capital undivided) の評価」内容が「読み」あげられ、それがおわるや、総裁は、さらに細部にわたって確かめたい者はだれでも、この目的のために会社事務所にそなえてある当該評価〔の計算書〕を自由に閲覧できるとのべ、そこで出席者全員の承認をうけ²⁴⁾ (Ibid., pp. 115-6) た。

25) 大塚, 前掲書, 332ページ。

に転化し、社員と公衆はそれによって彼等の資本の取引を調節することができた²⁶⁾。」

以上要するに、会社財産の「定期的検査 (periodical audits) は1657年のクロムウェルの特許状にいたるまで会社がとってきた簿記の秘密主義 (the method of secret book-keeping) からのあらたな離脱を劃する。それは、はじめ社員に彼等の資本をその現実価値でもって引出すことをゆるすために企てられたものであるが、部外者に企業の利益について判断することを可能ならしめて、[企業] 広告 (advertisement) としての役割をはたした。それは近代株式会社の基礎である公表会計の先駆 (the forerunners of the published accounts) をなし、株式をして確知した収益を基礎におく市場性ある有価証券たらしめた²⁷⁾。」

よって、「東インド会社は継続的合本の近代的有利性と半公開の性格をもつ定期的検査を組合した最初のイギリスの会社であった²⁸⁾」ということができているが、「1671年8月30日の総会」において「総裁が設立趣意書にしたがい……評価が総合本 (General Joint Stock) についておこなわれたと陳述し」ただちに「読み²⁹⁾ あげられた財産計算書——筆者が入手することのできた当社最古の貸借対照表——をみてみると、「総合本」の評価にもとずいて作成された「この時の貸借対照表は」表3として再録したように、「総合本」すなわち会社企業を主格として借方 (上部) に (××に対して=To 負っている) 負債をもってき、貸方 (下部) に (××に=By 託している) 資産をおく形式を用いて、その「財政状態が申し分なかったことを示している³⁰⁾。」

なお、「1678年6月1日」現在の「未分配残余総合本の評価」³¹⁾ にもとずい

26) Hunter, *op. cit.*, p. 135.

27) *Ibid.*, pp. 276-7.

28) *Ibid.*, p. 277.

29) Ethel Bruce Sainsbury, *A Calendar of the Court Minutes etc. of the East India Company 1671-73*, Oxford 1932, p. 69.

30) Scott, *op. cit.*, p. 134.

31) Ethel Bruce Sainsbury, *A Calendar of the Court Minutes etc. of the East India Company 1677-1679*, Oxford 1938, p. 338.

て作成された貸借対照表は、表4として示したように、借方貸方の上下配置を逆にして、上部に貸方を、下部に借方を、おいているが、その場合でも、やはり「総合本の諸出資者」(Adventurers in the General Joint Stock)³²⁾つまり「総合本」を主格として、会社企業の立場から、貸方(上部)に(××に=By 託している)資産を、借方(下部)に(××に対して=To 負うている)負債を記載する形式をとっている。

以上の叙述から明らかのように、イギリス式貸借対照表は、1660~70年代に、ロンドン東インド会社によって、そのイギリス最初の——いや、世界ではじめての——(簿記とはきりはなされた)公表財産計算書として、勘定記入とは別個の原理すなわち報告主体たる企業を主格として借方・貸方という容器へ入れる中味を決定する思考にもとずき、借方へ(××に対し=To 負うている)負債を、貸方へ(××に=By 託している)資産を記入する原型が編成されたのであるが、このようにしてロンドン東インド会社が創造したイギリス式貸借対照表の原型はやがてロンドンを中心とした初期のイギリス銀行業でも用いられるようになった。

III

1694年に設立された「イングランド銀行(The Governor and Company of the Bank of England)の一番最初の公表会計報告書」(earliest public statement of accounts)³³⁾は、「1696年12月4日に、当銀行の総裁と取締役が、下院の命によって、下院制裁所(the bar of the House of Commons)に出廷し、下院に提出した」³⁴⁾「1696年11月10日」³⁵⁾現在の「二つの報告書——その一つは当銀行の debtor and creditor account, 他の1つは当銀行が所

32) *Ibid.*, p. 338.

33) R. D. Richards, *The Early History of Banking in England*, London 1958, p. 280.

34) William John Lawson, *The History of Banking*, London 1850, p. 74.

35) Richards, *op. cit.*, p. 280.

有していた tallies on Parliamentary funds の明細表³⁶⁾である。そして、「当銀行によって提出されたこの一番はじめの報告書は……〔その日の票決により〕 *Journal of the House of Commons* [for December], 1696 [XI, p. 614] に公表され、また〔その後〕いろいろな著者によって³⁷⁾ しばしば引用されているが、その中の貸借対照表 (a state of their affairs)³⁸⁾ をみると、表5として示したように、やはり「資本」つまり銀行を主格として借方(左側)に(××に対して=To 負っている)負債をかかげ、貸方(右側)に(××に=By 託している)資産を記載する形式をとっている。

一方、1672年に金匠銀行家として開業したロンドン個人銀行家リチャード・ホール (Richard Hoare, 1648-1718) が記録し、1676年7月12日に締切ったウィリアム・ハール (William Hale) の勘定には、「同時代のロンドンの金匠ジョン・ワーナー [John Warner] の帳簿」³⁹⁾ にもみられるように、「勘定締切りに際して、貸方金額欄において貸方合計金額……の下に……その差引残高を」記入し、「勘定締切のあとに、……この勘定記入と計算に誤謬がなかったことを証明し」⁴⁰⁾ た「顧客の検査証明 (customer's inspection certificate) [と署名] が付記されている」⁴¹⁾ が、ハールによって書きこまれた貸方残高証明は、Mr. Hoare is debtor to mee と銀行家ホールを主格とする文形をとっている。そして、「1702年の彼の貸借対照表は」表6に示したように、これもまた、資本主にしてかつ企業主たる銀行家ホールを主格として借方に(××に対して=To 負っている)負債を、貸方に(××に=By 託している)資産を

36) James E. Thorold Rogers, *The First Nine Years of the Bank of England*, Oxford 1887, p. 82.

37) Eugen von Philippovich, *History of the Bank of England*, translated by Christabel Meredith, Washington 1911, p. 80.

38) Lawson, *op. cit.*, p. 74.

39) 小島, 前掲書, 78ページ。

40) 小島, 前掲書, 81-2ページ。

41) Richards, *op. cit.*, p. 242.

「これら人名勘定における記載方法、繰越記入法、締切時の証明、署名のごときは、勘定記入法が今日のごとく形式化し切ってしまうまでの過渡的過程を示すものとして」(小島, 前掲書, 83ページ) 位置づけることができる。

WILLIAM HALE ESQ is DBTR

June 5 1676	By £ 80 paid to Mr. Jacob Lucy p. Mr. Tho Williams p. note from Dbtr	£ s. d. 80 0 0
10	" £ 100 paid Mr. John fford p. note from Dbtr	100 0 0
22	" £ 100 paid Mr. Rich Parker p. note from Mr. Nicolas Clerke	100 0 0
July 11	" £ 54. 10. 10. paid Mr. Wm Morgan for Sr John Austen	54 10 10
12	" £ 73. 10. 0. paid Mr. Harner for Capt Haddock	73 10 0
	" £ 160 paid Dbtr p. his rect.	160 0 0
	" £ 50 paid John Hoskins Esq for the Lady Williamson	50 0 0
12	" £ 155. 10. 0. paid Mr. Nicholas Clerke	155 10 0
		773 10 10
	July 12 1676 This account seen and allowed by mee Will Hale	
	WILLIAM HALE ESQ is Cr	
May 26 1676	for £ 180 recd of Mr. Richard Green p. the hands of Mr. George fford p. order of Mr. Robt Everet	180 0 0
June 22	" £ 300 recd of Mr. Nicholas Clerke	300 0 0
July 4	" £ 503. 6. 8. recd of Mr. Richard Clapham	503 6 8
		983 6 8
	July 12 1676.	£ s. d.
	By this account seen and allowed by mee this day Mr. Hoare is debtor to mee two hundred and nine pounds fifteen shillings and ten pence and no more	209 15 10
	WILL HALE.	

[出所] *Hoare's Bank, A Record 1672-1955, The Story of a Private Bank,* London 1955, pp. 13-4; R. D. Richards, *The Early History of Banking in England,* London 1958, p. 242.

表 3

1671		Stock.	Dr.	
			£	s. d.
April 30	To several persons, as in folio 6 of the book of valuation		361,286	11 6
	To balance		645,827	2 3
			<u>1,007,113</u>	<u>13 9</u>
	Out of this estate is to be deducted a division of ten per cent. made in May last, amounting to		36,989	2 6
			Cr.	
April 30	By several debts owing to the Company, as in folio 1 of the book of valuation		136,735	19 0
	By Stock in shipping, as folio 3 of the said book		17,709	18 8
	By remains at Surat & the Coast of the cargoes of five ships sent in 1670, as in folio 7 of said book.....		170,586	8 10
	By plantation of St. Helena, being a place of charge for the accommodation of shipping			
	By remains at Bantam and the cost of the cargoes of seven ships sent thither in 1670, as in folio 9 of the said book.....		129,213	8 6
	By remains at the Fort, Metchleptam, and the Bay, and the cost of the cargoes of five ships sent thither in 1670, as in folio 10, ditto book		235,709	11 0
	By remains in England, as in folio 4 and 5 ditto book		313,255	11 6
			<u>1,003,210</u>	<u>17 6</u>
	By money in cash		3,902	16 3
			<u>1,007,113</u>	<u>13 9</u>

£ s. d.

By the profit on £ 98,569 5s. 9d. cost of the cargoes of four ships sent to Surat in 1669, and arrived there and part of them sold, which we hope will produce 10 per cent. clear of charges

By the profit on £ 199,815 1s. 2d., the cost of the cargoes of four ships from Surat, five from Bantam, and three from the Coast & Bay, arrived in England, which we hope will produce, clear of all charges, about 50 per cent.

By desperate debts owing the Company at home and & abroad.....

65,542 17 2

〔出所〕 Ethel Bruce Sainsbury, *A Calendar of the Court Minutes etc. of the East India Company 1671-1773*, Oxford 1932, pp. 69-70; William Robert Scott, *The Constitution and Finance of English, Scottish and Irish Joint-Stock Companies to 1720*, Vol. II, Cambridge 1910, p. 134. ただし、スコットの著書では、項目を証約し、資産から負債を直接控除する形式に書きあらためられている。

配置する形式によって、「彼の現金〔保有〕状態がしっかりしていることを示している⁴²⁾。」

42) *Hoare's Bank, A Record 1672-1955, The Story of a Private Bank*, London 1955, p. 27.

表4 London, 1st June, 1678. **The Adventurers in the General
Joint Stock** of the Honble. East India Company

Creditors	Dead Stock		Quick Stock	
	£	s. d.	£	s. d.
By the Presidency of Surat for their and subordinate Factories at Biliapatam, Dungom, Kār wār, Rajapur, Calicut, Broach, and Gombroom in Persia, dead and quick stock, the desperate debts being deducted.....	39,691	0 0	278,478	18 6
For Bombay Island, the Fort on it, its meliority, and new buildings	60,000	0 0	—	— —
For the revenues and privileges in Persia	20,000	0 0	—	— —
By the Agency of Fort St. George, for their and subordinate Factories (at Machlīpatan, Madapollam, Hūgli, Balasore, Kāsimbāzār, Dacca, and Patna), dead and quick stock, the desperate debts being deducted.....	17,445	0 0	574,759	4 4
For the Fort St. George, its meliority and buildings, with the privileges obtained on the Coast and Bay, by several farmāns	50,000	0 0	—	— —
By the Agency of Bantam, for their and the subordinate Factories (at Siam, Jambi, Tonquin, Tywan, and Amoy), dead and quick stock, the desperate debts being deducted.....	19,347	0 0	196,995	0 0
By the Island of St. Helena, its meliority and stores.....	10,000	0 0	—	— —
For moneys imprested to several Owners whose ships are now in Service	—	— —	23,486	19 8.
For moneys, gold, silver and several other goods and merchandises now in England, in custody of the following persons, namely:				

Of Humphrey Edcwin.....	17,790	3	0				
Thomas Sprigg	58,625	10	0				
Charles Aston.....	156,219	3	6				
George Papillon	14,932	6	0				
John Beard and T. Percehouse	10,244	15	6				
John Richards and Leonard Bray.....	29,561	7	9				
J. Prowd, Harris, Elkin, &c	957	13	4	—	—	—	288,330 19 1
By several debts owing to the Company here in England, namely:—							
By His Majesty, Re- mainder of 20,000 <i>l.</i> lent ...	8,750	0	0				
By divers Buyers on September and March Sales	18,273	1	0				
By sundry sorts of debts, as per the particu- lar account	20,290	2	5	—	—		47,313 3 5
By advance on the 3 Surat ships, and 3 Coast and Bay ships, over and above their cargoes out, the Custom freight and charges being deducted, as per the particular account, which is computed since the Articles above, — after those ships' arrival, the 7th August, 1678.....							102,255 0 0
	£ 216,483	0	0				1,511,619 10 0

Debtors

To several persons, owing by the
Company as well at interest as on sun-
dry other accounts, as by the particular
account

For 22 months' charges and losses on
Bantam Factory: their last book end-
ing the 31st July 1676.....

Dead Stock Quick Stock

— — — 685,640 12 3

— — — 9,937 10 0

For several debts owing as well in India to the several Factors and Mariners there in the Company's service, as here in England to divers on sundry accounts, not particularized in the General books, all which is computed may amount to about

— — — 25,000 0 0

And whereas several debts due to this Company both here and in India, are brought in credit of this computation as Quick Stock: which is hoped will be found so to be, yet lest any of them should prove bad or doubtful; the Committee on perusal have thought fit to place 20,000 *l.*, to make good the same

— — — 20,000 0 0

£ — — — 713,578 2 3

To balance being the estate of the Honourable East India Company, all their debts being paid.....

£ 216,483 0 0 798,041 7 9

£ 216,483 0 0 1,511,619 10 0

Besides the Articles in credit of this valuation in Contra, there are several doubtful bad and desperate debts due unto this Company as well in India as here in England, which are not brought in credit of this account; but are mentioned by way of memorandum.

	£	s.	d.
At Surat, Kār wār, and Calicut.....	17,440	16	4
At Fort St. George, Machlipatan, Madapollam, Hūgli, Balasore, Dacca, Kāsimbāzār, and Patna.....	37,251	10	6
At Bantam, Jambi, Siam, Tonquin, and Tywan	20,000	0	0
Bad Debts in India	74,692	6	10
Bad Debts in England, as by the particulars.....	22,479	14	4
Total Bad Debts, in India and in England	97,172	1	2

表5 Stock for the Honourable the Governor and Company of the Bank of England

Dr.	£	s.	d.	Cr.	£	s.	d.
To Sundry Persons, for sealed Bank Bills standing out.....	893,800.	0.	0.	By Tallies on several Par- liamentary Funds as per List thereof annexed with interest	1,784,576.	16.	5.
To Ditto due on Notes, for running Cash	764,196.	10.	6.	By Half a Year's Deficiency of the Fund of 100000l. per Ann. in the 2d year	50,000.	0.	0.
To Monies bor- rowed in Hol- land	300,000.	0.	0.	By Mortgages, Pawns, other securities and Cash	266,610.	17.	0.
To Interest due upon Bank Bills standing out.....	17,876.	0.	0.				
Balance	125,315.	2.	11.				
	<u>2,101,187.</u>	<u>13.</u>	<u>5.</u>		<u>2,101,187.</u>	<u>13.</u>	<u>5.</u>

London, November 10. 1696.

Examined by Order of the Court of Directors,
Per Thomas Mercer, Accountant.

〔出所〕 William John Lawson, *The History of Banking*, London 1850, p. 74 ;
James E. Thorold Rogers, *The First Nine Years of the Bank of England*,
Oxford 1887, p. 82 ; Eugen von Philippovich, *History of the Bank of
England*, translated by Christabel Meredith, Washington 1911, p. 80 ; R.
D. Richards, *The Early History of Banking in England*, London 1958, p.
280. ただし、ローソンの著書では、借方が上部に貸方が下部におかれている。

表6 Balance Sheet of Richard Hoare, Goldsmith

1702		Mr. Richard Hoare Dr.		£ s. d.		1702		P. Contra Cr.		£ s. d.		
Sep. 21.	To	Severall persons as appears in folio 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20	113,997	2	2	Sep. 21.	By	Gold and Silver valued at in folio 1 & 2	4,799	7	7	
	To	Severall persons as due to them for Plate & Jewells in folio 21	537	0	5		By	Severall Diamonds, & Pearls, etc. valued at in folio 3 & 4	4,690	0	0	
	To	Severall Plate Workers & other Workmen, due to them on 21st Sep. in do.	42	1	6		By	Severall People as lent with Interest in folio 5, 6, 7, 8	44,036	13	6	
	To	Money due to Richard Hoare to Ballance this Account	31,787	17	2		By	Severall People in the Severall Ledgers folio 9	55,851	10	10	
							By	Severall People for Plate in folio, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29	4,090	16	5	
							By	the Ballance Remaining Cash on Monday the 21st Sept. 1702	32,895	12	11	
			£	146,364	1	3			£	146,364	1	3

WE whose names are hereunto subscribed upon a serious and deliberate consideration and examination of the particulars hereafter mentioned for severall days, doe find that Munday the 21st day of September 1702 there was in the shop and belonging to the trade of Richard Hoare Goldsmith, the severall pieces & parcells of plate, Silver & Gold etc. etc., as within hereunto we have sett our hands this sixteenth day of October 1702.

Witness.

John Arnoid.
Wm. Cooke.
Thomas Cooke.

RICHARD HOARE.
HENRY HOARE.

ところで、それよりも少しまえの1898年にホイッグスは、さきにもべた「ホイッグのイングランド銀行」(Whig Bank of England)につづいて、新「イギリス東インド会社」(The English Company trading to the East Indies)を設立し、旧「ロンドン東インド会社」に対抗したので、「この二つの東印度会社」の間に激しい競走が展開された。……併し、一七〇二年に七年間の期限で両社の中に一種のカルテル的契約……が成立し、而してこの期間満了後〔1709年に〕、両社は株式交換によって完全に合併し、一種の東印度貿易トラストともよばれるべきもの……が成立した。之が所謂「合同東印度会社」〔The〕 United Company of Merchants of England trading to the East Indies なのである⁴³⁾が、この場合もめた複雑な合併条件についてのゴドルフィン(Godolphin)の「裁定にもとづく、裁定と同じ日すなわち1708年9月29日付の〔旧東インド〕会社の貸借対照表⁴⁴⁾は、表7にみられるように——合併直前という特殊事情を反映して「旧会社の負債はその資産を超過したので⁴⁵⁾「会社に対して399,795ポンド9シリング1ペンスの〔債務超過〕残高をのこす⁴⁶⁾形になっているが、企業または企業主を主格として借方に(××に対して=To 負っている)負債を掲げ、貸方に(××に=By 託している)資産を記載するイギリス式貸借対照表の原型が、もはや生成の段階をおわり、確固たるものとなったことを示している。

すでにのべたように「オランダの著述家シモン・ステヴィン……は、1608年に、商人が死亡したりまたは解散した時だけではなく、毎年企業のための貸借対照表(balance sheet for an enterprise)を作成することを要求した⁴⁷⁾が、それは、勘定記録にもとずいていたとはいえ、残高勘定を通さずに、直接に勘定の外側にそれとは別個の紙葉において作成される仕組になっていた。だから、

43) 大塚、前掲書、340ページ。

44) Scott, *op. cit.*, p. 174.

45) Hunter, *op. cit.*, p. 380.

46) Scott, *op. cit.*, p. 176.

47) Oskar Lange, *Political Economy*, Vol. I, translated by A. H. Walker, London 1963, p. 162.

表7 The Governor and Company of Merchants of London

	Dr.	£	s.	d.
1708 Sept. 29.	To money at interest owing to sundry on the company's seal	1,035,448	9	3
	To 6 months' interest thereon due to date.....	31,063	9	1
	To "Interest for several bonds that may have been 12 or 18-months due"	3,000	0	0
	To Almshouse at Poplar "owing to them"	2,700	0	0
	To Customs and to Freight and to several persons for goods sold in private trade	9,728	10	9
	To Customs and to Freight due to United Company	16,312	5	3
	To dividends on stock (unclaimed)	6,918	18	5
	To Factors' salaries payable in England and cash paid by Factors in India for remittance home (estimated).....	20,000	0	0
	To Interest on bonds due by company more than the Interest receivable by company on the 70% Additional Stock will pay to March 1, 1709...	5,175	16	7
	To charges from date to March 1, 1709.....	7,000	0	0
	To balance Indian accounts per award	96,615	4	9
		£ 1,233,962	14	1

Second (and revised) account current

1708 Sept. 29.	To total liabilities	1,249,807	7	6
-------------------	----------------------------	-----------	---	---

* 総額ならびに残高における相違は、各項目の評価替にもとづくものである。

[出所] William Robert Scott, *The Constitution and Finance of English,*

trading to the East Indies, their account current

Cr.	£	s.	d.
By 70% on £ 988,500 due by United Company.....	691,950	0	0
By interest to date	20,758	10	0
By Six months' interest on £ 998,500 due at Christmas	39,540	0	0
By the eighth and twelfth quarter's dividend on same in arrear.....	22,364	19	3
By money advanced on stock and disbursements for the united trade	56,329	13	5
By goods remaining in the warehouses.....	1,000	0	0
By good debts in England	5,000	0	0
By cash in hand.....	24,504	19	4
By balance	372,514	11	8

£ 1,233,962 14 1

of same date (condensed)*

By total assets	850,011	18	5
By balance	399,795	9	1
	<u>£ 1,249,807</u>	<u>7</u>	<u>6</u>

勘定記入原理に逆って、企業=資本または企業主=資本主を主格として借方（左側）に負債を、貸方（右側）に資産を配置する形式をとることができたのである。この点は、ステヴィンの要求を——直接とりあげたかどうかはともかくとして——はじめて実行にうつした17世紀のおわりの3分1から18世紀初頭にかけてのイギリスの代表的企業の場合にも、基本的には少しも変りはない。彼等が創造し、固めたところのイギリス式貸借対照表の原型は、残高勘定を要約した一覧表ではなく、勘定記録から相対的に独立した財産（評価）計算書として形成されたのである。したがって、そこでも、報告主体たる企業（資本）または企業主（資本主）を主格として、勘定記入原理とは逆に——たとえば、ウィリアム・ホール勘定では借方に By、貸方に for という符号をつけているのに、リチャード・ホールの貸借対照表では符号を左右交換して——借方に（××にだいて=To 負っている）負債を掲げ、貸方に（××に=By 託している）資産を記載する形式となったのである。